

多摩デポ通信 第20号

特定非営利活動法人共同保存図書館・多摩

2011年10月10日発行

〒182-0011 調布市深大寺北町一・三一・一八

● H P / <http://www.tamadepo.org/>

● E-Mail depo_tama@yahoo.co.jp

全国図書館大会

資料保存分科会

デ企
摩は運
ポ画に協

全国図書館大会が10月13日～14日に多摩各地で分散して開催されます。

14日の「第11分科会・資料保存」は府中駅北口の中央文化センターひばりホールで「災害と資料保存」のテーマで行なわれます。この会は「多摩デポ」が全面

協力して準備しています。

阪神・淡路大震災が起きた1995年に同テーマで分科会がありました。再び大地震、そして「津波と原発」という、未経験の事態に直面した年に開催する、資料保存の分科会です。

災害の問題は様々な会で取り上げられると思いますが、(非常に時に図書館の果たす役割やサービス)と云った議論は他に譲り、私たちは被害の実態を踏まえ、図書館の役割と災害対応について考えたいと思います。

分科会で発表予定の多摩デポの報告要旨は4ページに全文掲載しました。



『図書館の電子化と無料原則』

多摩デポブックレット第6号 特急製作 会員には今号に同封して配布
津野海太郎さん講演録

今年5月の第4回総会の記念講演は多摩デポ顧問の津野海太郎さんでした。ブックレット第6号は、この講演をもとに、特急で製作・発行しました。

書籍の電子化が進み、タブレットパソコンを使って「読書」をする人をあちこちで目にするようになってきた昨今、「電子化になろうとなるまいと、図書館の利用は無料でなくてはならない」と津野さんが言い切る理由とは？

………当日の講演をお聴きにならなかった方は、是非直ぐにお読みください。図書館の無料原則の根拠について、改めてじっくり考えましょう。税込630円。

福島県矢吹町図書館 被災資料のガラス片 除去作業終了へ

多摩デポでは、日本図書館協会の被災図書館支援活動の一環として、被災資料のガラス片の除去に取り組みました。

新幹線の新白河駅に近い福島県矢吹町立図書館では、書棚が倒れて床に本が散乱していた上に、フロアの天井の蛍光灯が落下し、割れた細かいガラス片がかぶりました。目に見えるような破片はすぐ取り除きましたが、慎重を期して矢吹町で公開を見送った約五千冊の蔵書を復元するお手伝いです。（図書館自体は6月1日に再開を始めています。）

前号で報告しましたが、6月30日と7月1日の2

日間、現地に泊まりがけで行き作業しましたが、2日間で三四〇冊程度ができただけでした。残りの処理も支援したいとの思いから、未処理資料の一部を多摩に運んで作業することになりました。

作業場所に東村山市内の矢崎理事自宅の一室を使うことができ、9月4日にレンタカーで段ボール57箱（約二千冊）を運び込みました。多摩デポHPなどでボランティアを呼びかけ、9月6日から作業を始めました。11月末までに終了してお返しの約束です。始めるにあたり、どういうテンポで進むか不安もありましたが、連日たくさんの方に参加していただき、この通信が届く頃には、ほぼ全冊終了できる見込みとなっています。何でもないように見える全冊をページずつめく

って刷毛で掃い落とす作業は極めて単純ですが、根気と手間を要し、人手が必要です。さまざまの繋がりで、たくさんの方が参加して下さり事務局は大感激です。たくさんさんの差し入れ、薫り高い挽きたてコーヒーサービスも！

近くは徒歩・自転車組、遠くは足立、江戸川、千葉、横浜からも。集まる方の顔触れも、公共図書館、学校図書館、大学図書館、国会図書館、文庫の方、市民として図書館に関心のある方、お友だち繋がりで参加など、延べ180名以上、実人員でも80名近い方が参加してくれました。

作業室で顔をあわせ「どうしてあなたがここにいるの！」と驚きの声が上がったり、話しているうちに意外なところで繋がっていることがわかったり、自己紹介を含めたおしゃべりもなかなか



楽しい時間です。(もちろん手は動かしながら！)

そんなこんなで予想以上のペースで進み、「被災地の図書館のために力になりたいという人がたくさんいること」、「大勢の人の力」をつくづく感じました。

ただ、この被災資料を多摩に運んで作業するという決定と参加お願いの連絡は、前号の通信以降の動きなので、会員の皆さん全員にハガキなどで周知はしておらず、この通信で初めて知る方も多いと思います。

当初、この通信20号は、タイミングとしては作業を始めたながら、会員の皆さんに参加を呼び掛ける手段になるつもりでした。思いがけなく早く進み、ほぼ結果報告になってしまいました。申し訳ありません。

以下、作参加された皆さんの声の一部を紹介します。

*現地までは行けないので、東京でこういう活動ができて、とてもうれしい。

*震災支援で何かやりたいと思っても募金ぐらいしかできなかった。図書館に關わる仕事ができよかった。

*本の数が大変多く、一ページ一ページを刷毛で掃つていくのはすごく腕にきまず。ですが、早く本たちを元のおうちに戻してあげたいのでがんばります。

*ガラス片は見つからなくても、利用者の「安全」のためには必要な作業なんです。

*ここで日頃おつきあいのない、違う館種の方とお話してできるのが楽しい。

*他にもこういう支援を求めている図書館があるので

はないか？

*少しでも支援活動に関われてうれしかった。また、被災地のビデオ映像も見せてもらうことができよかった。

*私が掃つた本は個人詩集のコレクションでした。一冊一冊、紙質や大きさ、活字の選択にこだわった本を久しぶりにさわりました。紙の感触が指の腹に残っています。



東大和市立図書館 書庫資料の多摩地域 重複所蔵調査終了

— 作業参加の皆さん
おつかれさま！

多摩デポでは、一昨年の日野市立図書館、昨年度の立川市図書館に続き、今年度は東大和市立図書館の依頼を受けて、一冊本調査(その市では最後の一冊の保存蔵書が、多摩地域の公立図書館全体の中では、それぞれ何冊残してあるのかを調査し、今後は多摩地域全体で最後の二冊まではストック出来るようにするための調査)に取り組みました。

今回の冊数は除籍対象の約四千冊で、7月半ばから作業を開始しましたが、会員外の方も含め、たくさんの方の検索ボランティアの皆さんにご協力いただき、無事

終了しました。ISBNありの資料が多数だったこともあり、予定より早く終了することができました。特に今回は東大和市の職員の方が多数参加して下さったのがうれしいことです。

職員会議で「検索すること、自分たちが除籍しようとしている資料の多摩地域での位置づけがわかるし、他市での所蔵状況も見えること、当市の除籍基準を考えるなど、選書眼を養ういい機会になるから」というような議論があり、自分たちもやろうと、本庁に異動してしまっている司書を含め、13人がボランティアとして家でパソコンに向かってくれたそうです。

結果は、四千冊のうち、東大和市のみ所蔵が全体の約2パーセント、他に一自治体所蔵が4パーセントで、二自治体以上で所蔵しているものが94パーセントでし

た。検査依頼のリストに出たのが、あまり古い資料ではなかったのでもうこういう結果になったと思われる。検索をしていると、多摩各市の保存・廃棄の状況が見えてきます。多摩地域の資料の保存が、決して特定の自治体だけに集中してはいないこともわかります。

めざす共同保存図書館の実現までは遠い道のりですが、せめて「当該自治体以外に一自治体所蔵」分の、資料のデータを多摩地域全体で共有できるように仕組み・申し合わせができないかと思えます。



図書館大会の資料保存分科会で発表する予定の要旨全文です

長期的視点に立ったコレクション復興支援と地域資料の保存体制

「共同保存図書館・多摩」からのアピール

1 「多摩デポ」の紹介

多摩地域の公立図書館は、東京都の図書館振興策を受けて1970年代から急激に設置され、すべての自治体で活動が展開されている。当初の図書館の大半は貸出を中心の活動で、保存スペースや保存機能の確保までは及ぶものではなかった。以来四十年、熱心な利用層に支えられ、市民生活に図書館は根付いている。求められる資料の幅は広く奥行きも深い。新刊とともに古

い資料が求められることも多く、図書館として保存に真価が問われている。各館で書庫の限り保存しながら、相互協力で資料提供を支え合っている。

多摩の図書館が伸長して来られたのは「図書館の図書館」としての都立図書館のバックアップが大きかった。相互協力も毎週の都立の協力車で支えられている。十年前、都立図書館が都立中央図書館を中心に再編成され都立多摩図書館が縮小される事態に、市町村立図書館と利用者による撤回運動が起こった。その流れから生まれたのが、市町村の図書館が共同で保存図書館を創り出そう、という市民運動「NPO法人共同保存図書館・多摩」（略称・多摩デポ）デポはデポジットライブラリーの略）である。これまで「東京にデポジットライブラリーを！」（ポ

ット出版)として基本構想を発表し、都立図書館大量除籍本から市町村の図書館全体での希少本をより分ける市町村立図書館長協議会の活動に参加し、依頼を受けて幾つかの市立図書館の除籍候補資料の多摩地域図書館の重複所蔵調査をした。図書館での除籍の際の歯止めの共同ルールを提案するなど、仮想の共同保存図書館の準備作業をしている。多摩デポ講座の開催ブックレットの発行、機関紙やホームページでの発信等もあるが、詳細は略す。多摩地域の図書館長協議会は、類似する「共同利用図書館」構想報告書を発表し、主催する多摩地域公立図書館大会で、毎年この問題を取り上げるなど、同じ方向で動いてきた。

2 共同保存図書館 という理念

私たちは「共同保存図書館」がローカルなものだとは思っていない、図書館事業の継続・発展の上で必然的によりの地域でも起こり発足する必要があるだろう、と考えている。

「利用のための資料保存」の仕組みとして、各館での閉架書庫がある。図書館が出来、資料収集し提供し、という活動を継続的に続けられ、どんな大きな書庫を持った図書館でも本が溢れる。どれを除籍しどれを保存するか「第二の選書」が重要だ。しかし図書館の役割から言って、個々の図書館が単独で書庫のスペースに合わせて除籍するしかないのでは大変心もとない。地域全体の信頼関係のある図書館同士で保存図書館を作る。持ち込みルールを決め各館で間引きながら本を集め、地域で提供可能な資

料の厚みを確保し、増やしていく、そういう長期的な〈保存・提供モデル〉を考えている。

理念的には都道府県立図書館が、自らの事業の一部として、コーディネートし、市町村に持ち込み参加を呼び掛けることに期待したい。県立・市町村立の連携のもとに創出される共同保存図書館は、蔵書検索が出来、図書館に対して貸出を行ない、定期配送車を運行する仕組みでなければならぬ。全国の図書館が安定して活動が続けながら、地域毎にそういう図書館の発展モデルに立ち至ってほしい、それが日本全国の図書館資源・図書館の力を高めていく。多摩で私たちが始めていることはその一部だと思ふ。

3 震災が起こって

東北と比べものにはなら

ないが、多摩地域も被災した。幾つかの市で書架の本が散乱した。3・11の帰宅困難。以後、多くの自治体で図書館の開館が揺れた。計画停電。図書館の行政内の位置、市民との関係。NPO理事会での議論、機関紙「多摩デポ通信」での各市の被災・休館対応の特集記事、御用聞きを行って福島の被災地支援。東北の被災図書館支援報告の「多摩デポ講座」。

3月以来、多摩デポでは被災図書館にNPOとして何が出来るか、いろんなアイデアが出された。市町村の図書館や都立図書館だったら、もしかしたら出来ることも話した。現地を見て、また状況を知り、被災地の要望とのマッチングの難しさが次第にわかってきた。今後の状況変化もあるだろう。しかし、図書館が図書館らしく復興するには今後

幾ら資金が投入されても足りない、私たちにもやれることがあるのではないか。それは自分たちが問題にしてきたことと重なっている。

4 被災地図書館の蔵書復興の支援

長期的な図書館の復興支援について、現地の図書館人と図書館の今後の立ち上がりや構想に注目し、ミスマッチとならないように留意しながら、全国の図書館と図書館関係者たちで支援に長く取り組む必要があるのではないか。不遜かもしれないが、多摩デポはそういう視点で長く、やれることをやりたい。

被災地には様々な支援が入った。行政支援もあるし、ボランティアもある。各業界がそれぞれ支援してもいい。だが、図書館にとって復興とは何だろう。今後、

簡単ではないが、公的資金が投入され、壊れた図書館施設が再建され、買える新刊書で蔵書が満たされるだろう。もちろんそれを期待したい。でも、いくらお金をかけられても、それはかつてそこにあつた蔵書の厚みではない。

多摩デポでは、「本の里親探し」事業を行っている。買えない全集の欠本等を補充しませんか、という、図書館で求める本と、貰い手を探している本のマッチング事業である。まだ痛んでいるわけではない全集等がスペースの限界で自治体内に2セットあるのを除籍せざるを得ないことがある。あるいは、状態が良く、生かしたい本が寄贈されても既に蔵書にあるので受け入れられないことがある。市町村の蔵書の横断検索をすると、その全集を持っていない図書館が見つかる。そ

の巻がちやうど欠本であつたりする。一方で、「図書館として欲しい本リスト」が事前登録されていてもいい。そういう資料斡旋の経験は、被災図書館支援に生かせないだろうか。

また、東京都内の区市町村立図書館では、地域資料の「里帰り」というのが、或る程度定着している。現在「里帰り」で図書館に送っているのは、該当自治体が発行した地域資料の範囲だが、これを被災した地域を舞台にした小説、被災した地域にちなむ主題を持った書物全般、というふうに拡大して考えられないだろうか。全国の図書館が、被災地域にちなむ主題を持った旧蔵資料を除籍する時にはコーデイナーに問い合わせる、あるいは被災図書館の「欲しい本リスト」にないか照合するという仕組みはどうだろう。

日本の出版状況で一般的に巻数の多い全集・講座が発行されたのは1980年まで、参考図書でもせいぜい90年代まで、既にほとんど絶版という印象がある。それらが電子データに置き換わっているかという点、大半がそうなっていない。もちろん情報更新が必要な部分もあるが、原理的、概括的な基本図書群の不在が、図書館復興のネックになっていくのではないか。こうした面でも図書館同士が、分けられる蔵書を提供することで支えられないか。もちろん、書誌データ付きで装備フィルムコーデインング付きで提供できるのがベストである。

被災地の県立図書館の役割、日本図書館協会の役割は大きいと思う。また大変だが、現地の図書館関係者が復興のプログラムを考え、提案することが重要である。

図書館復興に多くの財源が回ってほしい、それを前提に、被災地の図書館と図書館人の声に応え、蔵書復興その他で、業界人として長期的に支援する活動を提案したい。全国の図書館に呼びかけ、日図協を通じて御用聞き等もしていきたい。

5 地域資料保存の リスク分散への提案

昨年は、以前に都立多摩図書館で収集されていた、多摩全体にわたる広域地域資料群が大量廃棄された年だった。背景には都立図書館全体の書庫の狭溢とそれを背景とした〈都立図書館として1冊収集・1冊保存〉の考え方があった。今後は都立中央図書館に1冊あればよい、という調整がされた。地域資料は該当自治体ばかりでなく、比較研究するために広域に集め利用でき

る拠点が必要だ、多摩の地域資料を広域に一覧できる施設として、都立多摩図書館が機能し再興してほしいという申し入れをしたがかなわなかった。市町村立図書館長協議会でも同様の申し入れをし、最後は課題を残しつつ市町村が出来るだけを引き取った。

その際の私たちの論点の一つとして、地域資料は特に保存のリスク分散が必要ではないか、ということがあった。災害が起こることを考えたら地域資料は一か所で1冊保存しているからいい、とはならないのではないか、との視点であった。今回の被災ではそれが現実となり、古文書類まで含め、地域の貴重な資料が被害にあっている。残された資料の修復事業は可能な限り行われる必要があり、その事例には多くを学んでいきたい。一方、被災により

役所・民間会社・機関が持っていた書類やデータが失われ、日常業務に支障が生じていること、今後はリスク分散が必要だ、という議論が様々な分野で起こっている。

図書館でも今後は地域資料保存のリスク分散に本格的に向き合うことが重要ではないか。一部しかない貴重資料はデジタル化推進が重要だろう。複数部あるものは姉妹都市の図書館との連携や、県立図書館に広域の地域資料コレクションを作り、積極的に公開しつつ分散しておくことなどが考えられる。

多摩デポがまだ「多摩むすび」の名で運動していた6、7年も前、東京都議会で、「これは資料・情報の広域的セーフティネット構築の提案ではないか」と活動を評価する発言をされた議員がいたのを、後に議事録

で知った。私たちは図書館の言葉で語ることしかできず、迂闊にもその発言がその時もう一つピンとこなかった。今、改めて思い出している。

6 図書館人が図書館 支援に行くこと

私たちNPOは、現役図書館員、図書館OB、関心を寄せる市民、合計100人程で構成されている。8月初旬現在、日図協の第一次図書館支援隊に繰り返し参加できた図書館OBの会員から広範囲の生々しい現地情報が寄せられ、貴重な情報源となっている。避難所での「読み聞かせ」がメインの支援活動だった第一次支援隊で、現地での手ごたえと今後の膨大な課題をずっと感じ持ち帰ってきた会員もいる。時間が少なかったため、支援で届いた本

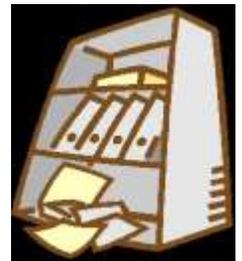
がそのままでは使えないという要請に、装備ファイルのコーティングボランティアに行ってきた者もいる。集団としては、日図協の幹旋により、福島県矢吹町の図書館資料の復旧（飛散ガラスの除去）を行なった。

この活動は、残る資料数千冊を多摩にトラックで運んで作業を継続している。被災地に行き、図書館復旧支援に参加することは多くを学ばせてくれる。特に、現役の図書館員が支援活動を行うことは日常業務への振り返りのために重要だと思う。

震災後、圧倒的な津波の威力と甚大な破壊のニュース映像が全国にもたらされた。その直後から、被災者たちの不自由な生活と共に、避難所で本が求められている、読み聞かせが盛んに行なわれ、それが避難者たちの力になっている、との報

道が伝わってきた。被災情報への掲示板の役割を自覚的に果たす図書館の様子も伝わってきた。全国の図書館人たちは、図書館の原点のようなものに想いを馳せ、励まされたことだろう。

被災地支援が長期化し、多くの自治体で職員が派遣されている。しかし自治体から図書館復興への派遣はほとんど見られない。またボランティアとしても現役図書館員が被災地に行く例はまれだ。図書館員はいろいろな意味で余裕がなくなっているが、ごく短期の日図協の支援隊参加や幹旋による被災支援参加でも、明日からの図書館業務に重要な体験ではないだろうか。各地でそういう動きが起るといい。私たちは多摩デポの本体事業の追求と同時に、被災図書館復興プロジェクトに取り組み、参加を呼び掛けていきたい。



都立多摩図書館の移転改築について

多摩デポ理事長
座間直壯

平成23年1月27日都立多摩図書館の移転改築計画が発表された。移転先は国分寺市泉町2丁目102番9（JR中央線西国分寺駅徒歩三分）の都有地で、移転時期は平成28年3月（予定）、図書館部分の延床面積は約九千㎡（現在約四四〇〇㎡）、改築の理由は老朽化とサービス向上とのこと。1987年5月に建設された都立多摩図書館を移転改

築する理由としては不十分であり、何故今なのか？という疑問は多くの人が抱いたことと思う。

移転計画の是非を問う前に、我々はこの計画の具体的な内容が都立図書館の今後の計画の中でどのように位置づけられ、とりわけ多摩地域の住民に都立図書館としてはどの様なサービスを提供する考えなのか知る意味で、質問書「東京都立多摩図書館の移転について」を作成した。

5月17日（火）に齊藤誠一事務局長と一緒に、直接の担当窓口である教育庁地域教育支援部管理課長の小菅政治氏を訪ね、都立多摩図書館の移転計画についての経過と今後の計画について説明を求めた。しかし、都としての考えはホームページで公表しているので現段階ではその内容で理解して欲しい。それが現段階で説

明できることであり、サービスについても現状を維持していく方向で、それ以上でもそれ以下でもない、とのことであった。

多摩デポとしては、移転の経緯や新たな機能整備・充実、資料保存スペースの確保、サービス向上などの具体的な計画について伺う予定で「質問書」を用意したが、都としては現多摩図書館の規模・機能を拡大する計画は考えていないのが現状であり、「質問書」をいただいても答えられないので、受取ることには出来ないという、甚だ残念な結果であった。

その後の移転計画の進捗は、8月29日(月)に基本設計をプロポーザル方式で行うことを発表し、設計業者の決定は11月17日の予定である。開館の平成28年3月に向けて、第一歩を踏み出すことになる。

この問題は多摩地域の身近な図書館を利用して多くの住民にとって大きな問題なので、今後も根気よく建設経過に注視し、多摩地域の図書館長協議会の動きなども見ながら対応していきたいと考えている。

なお、「質問書」の内容については多摩デポホームページをご覧ください。

多摩デポホームページ
<http://www.tamadepo.org/>

10月9日の多摩新聞(朝刊)に、被災作業構(吹町)の復興が扱われ、記事が扱われ、大きな出ま



陸前高田古文書研究会 探索資料支援

―横断検索、里親探しの
経験を生かして

岩手県陸前高田市は東日本大震災で甚大な被害を受けました。松原と残った一本松のその後の出来事も含め、多数の報道があり、広く知られるところとなりました。

その陸前高田市では、図書館も津波被害を受けました。職員は全員死亡または行方不明、資料は水没という、言葉にならない状況です。

被災前の図書館には、地域資料として、岩手県文化財仙台藩気仙郡大肝入吉田家文書「定留」などの資料がありました。「吉田家文書」95巻は、地元の陸前高田古文書研究会が解読をしており、残り2巻とな

ったところで震災が発生、解読原稿が流されてしまいました。文書原本とデータが発見されて修復が進められているのがせめてもの幸いでしょうか。

古文書研究会の皆さんは自ら被災なさっている容易ならざる状況の中で、再び膨大な解読作業に取りかかることを決めました。しかし解読に必要な図書館資料がすべて失われてしまったので、提供を求める図書リストと支援要請が発信されたのです。

支援要請は複数のルートで「拡散」していったようです。そのひとつを多摩デポ会員がキャッチし、多摩地域からも支援できないか、事務局で急遽検討をしました。日本図書館協会東日本大震災対策委員会と連絡をとりながら、これまでの除籍予定資料の横断検索のノウハウを生か

して多摩地域の図書館の所蔵状況を調査。その結果、提供していただけたら、資料が1冊あったため、里親探しの経緯を生かして所蔵のくにたち図書館にお話しし、御協力をいただくことができました。こうして『葛西四百年』（佐藤正助著 NSK地方出版社）という本が多摩地域から陸前高田市へ発送されました。ささやかながら、陸前高田市の復興への歩みの一歩となればと願っています。

その後、図書リストの資料は、近隣や吉川弘文館からの寄贈により、ある程度届けられているようです。一定期間後も揃わないものは、最終的に日本図書館協会東日本大震災対策委員会が相談を受けることになっています。

今回の支援要請は、交通整理役が無いまま、支援要

請と図書リストが多方面に「拡散」したため、資料送付・問合せ先として住所電話番号を公開していた陸前高田古文書研究会の方は、あちこちからの連絡を受け大変だったのではないかと推察しています。被災地に負担をかけないよう、支援要請を最初に受けたところが交通整理役をどこかの団体にまかせるとか、せめて要請情報を会員に流す団体は、団体内の取りまとめは自前で行う、などの配慮をする必要があったように思うのです。

多摩デポは、これまでの横断検索や里親探しの経緯を生かし、短時間で多摩地域内の情報を把握、支援の仲立ちをして資料送付まで行うことができました。他地域や他団体にも参考になればと思います。

（事務局 吉田）

図書館総合展 ポスター セッション 多摩デポ参加へ

第13回図書館総合展へ
今年も展示参加します

横浜に来たら、

どうぞ覗いて下さい

多摩デポブックレット
なども販売しています

日時…11月9日(水)

～11月11日(金)

場所…パシフィコ横浜

(横浜市西区)

みなとみらい地区)

主催…

カルチャー・ジャパン

★会の現勢

2011年10月1日

現在

●会員

(個人会員102名)

(団体会員3団体)

●賛助会員

(個人43名)

(団体2団体)

総会以降、続々会費を振り込んでいただいています。が、まだの方は、入金を、よろしく願います。

●年会費

正会員(個人・団体)

五千元

賛助会員一口 二千元

(個人一口団体五口以上)